

遙か青春

岩手県 鈴木良雄

飢餓地獄の春

自然の恵みが我々を再生へと導いてくれた。和らぐ自然体の陽光は、やさしく肌を慰めてくれる。そして、冬ごもりからさめた虫たちのようにうごめき出した。誰もがまず食べる物をあさる。

タンポポ

凍土の表面がようやく緩むころ、一斉にタンポポの根掘りが始まった。鉄の棒、スコップ、バール、デレッキ、道具は何でも見つけ出す。地面に残る去年の枯れ葉を頼りに、一気に掘り起こして根を取り出すのに夢中である。

採ったタンポポの根は、水洗いして飯ごうに押し詰めて、ストーブにのせて煮る。ストーブの上

は満杯で、外でたき火する者もある。

煮たタンポポは、たちまち各自の胃袋の中へ急行する。飯ごうにはまたタンポポが入れられ、暇さえあれば、次から次へと採る、煮る、食うの大奮闘である。塩などないから無味であるがお構いなし、ただ食べればよいのだ。その食べ心地こそ無類の満足感であるのだ。

そのうちに葉が出てくれば葉を食べ、花が咲けば花も食べる。このころには雑草の若芽も伸びてきて、これもゆで上げただけで馬牛のように食べる。そう言えば、馬牛のように酷使されるのだから、それでよいのだ。食べれば達者になると頑張るのである。

事実、大なるビタミン補給効果の現われで、隊員たちは日に日に顔色がよくなり、体調とともに明るい元気を取り戻していった。誰もが、タンポポのおかげで生きかえったと語り合う。

しかし、根こそぎの採集であるから、次第に採り尽くされ、タンポポ畑のようだった近くの野に

はほとんど見当たらず、遠くへ出かけるようになった。

松皮餅の開発

春の訪れとともにシベリアの植物や物体は、生気を吹き返すように活動開始である。冬期間に伐採した貯木場の丸太の枝からも芽や葉が出てくることがある。

このころになると、赤松丸太の三層の皮を剥ぐと、木部との間に、柔らかでぬらぬらした白色の皮が現われる。我々はこれに目をつけたのであった。これなら、豊富な丸太から大量に採集することができる。これを飯ごうで長時間煮詰めるのであるが、容易に繊維が溶けてくれないので、これを棒でつく。餅状になったものに炊事場から自分の食事分量を混ぜて更につくのである。これを松皮餅と名付けた。要は、いかに分量を増加させて胃袋を慰めるか、苦肉の策であった。

一時的には流行したが、松の匂いはよいとし

て、繊維のからみあいが強くと、長続きしなかった。

茸の恵み

八月、短い夏が過ぎ去り、初秋を迎える。シベリアの松林には一斉に茸が出る。これも我々に對しての自然の大恩恵であった。

シベリアには珍しい小時雨の晴れ間、収容所裏の松林に、各自で工夫した入れ物を携えて入っていくと、時期到来とばかり生え出した茸の群生が、足の踏み場もないほどで実に見事なものであった。最も多い種類は、俗称「粟子茸」次いで「初茸」その他、多種多様の雑茸が山一面に現われ、茸畑となる。

この場合でも、それなりの達人（茸博士）がいて、茸の判別を教えてもらえる。世が世であればこの上もないレクリエーションであろうが、この場合は別で、死活にかかわる食料の確保である。無言の中で、無心に採取する。

持ち帰った茸は、これも手回しよく飯ごうに押し込められて煮る。味付けもない茸が、一齐に各自の胃袋へとすすり込まれるのである。味わい感とは別、空腹を満たす満足感が先決である。飯ごう一杯を瞬く間に平らげて、また飯ごうで煮て食べるのである。これが、作業の合間を利用してのことであるから大多忙であった。

茸の季節は短く、この節に大量に採取して塩蔵したいとの話も出たが、日常の炊事の塩でさえ、塩漬魚の塩分を利用するという有様であるから、できない相談であった。

シベリアの狩人たち

気候がよくなり、作業も経験から要領を身につけて体力の消耗をカバーでき、環境改善とあわせてタンポポ・雑草で生き残った抑留者たちは、心身ともに元気を回復していった。この頃になると、これも自然の恵みであろうか、あの鬼の警戒兵も厳しさが薄れ、親しげに付き合うようになって

て、収容所の門衛もなくなり、出入りもある程度自由になった。

体力を取り戻した同僚たちは、獲物を求める野性動物のごとく、敏捷さと凶暴さを発揮するようになる。駅付近の部落民の放し飼いであろう山羊、豚、牛が、餌を求めてやって来る。これを見逃すわけがない。あたりの様子を見極めて数人が襲いかかる。追いつめられた獲物は、たちまち処理され、隠匿場所から逐次隠密のうちに体内の栄養となった。

当時、三人寄れば「食うこと」「帰国のこと」以外は語ることを忘れた。飢餓の集団なれば、立場は変わっても一意専心、食うことにあるのみであった。そして食うための手段は次々と開発され模倣される。かつての虚弱をきわめた時期には、犬にもかみ殺されそうな状態であったが、立ち直りによって犬狩りをする。犬は馴れやすいから、すぐその手にかかるのである。獲物は手当たり次第で、時には仔牛までもやった連中もいたよ

うだ。数人のグループで、あくまで隠密に事を運ぶのである。飯ごうの中味を問われると、山でウサギをとって来たと言う。シベリアの山でウサギは見たことはないのに。

部落民の家畜がかなりの被害と思われたが、別段、問題は起こらなかった。ソ連という国は、そういう国柄なのかもしれない。いづれにしても、越冬の体力づくりの努力が命を支えたのである。

大根泥棒の夜行軍

ソ連の国内事情も戦後の混乱から落ち着きを取り戻したのか、あれほど不定期むちゃくちゃな貨車の入構が、幾分か事前予告があるようになった。今晚は貨車の入る予定がないと知れば、安心して眠りにつけるのである。ところが、そういう晩こそ、貨車積み作業に代わる夜仕事に出かける集団があった。

私の器材整備作業は、毎晩のように夜中の一時までは続くので、これに気づき眺めていると、舎

内が寝静まったところ、黒い人影が二、三人ずつ忍び足で舎外に出て、小走りに門の外へと消える。数えると十数人にも及ぶ。

あとで聞いた話によると、この人たちは途中で集結して、六、七キロメートルも先のコルホーズ（集団農場）を目当てに暗い夜道を急ぎ、到着するや手当たり次第、大根、人参を引き抜いて大きな袋に入れ持ち帰るのだという。

これは何回となく繰り返し実行していたようであるが、ある晩、農場側に気づかれ、猟銃の発砲で、あわてて逃げ帰ったとも聞いた。人は苦境にあつてこそ生きるための執念が強くなる。私は別棟で知らずにいたが、各自の舎内床下は、大根その他の食料貯蔵庫であった。いつの間に土を掘り出したものであろう。道理で、彼らがときおり大根や人参をかじっているのを見かけたのである。

生死のはざまをさまよう環境にあつては、誰人として他人に食物を分け与えることはない。あくま

でも自分の生きることと精いっぱい、相手の救助といった心身のゆとりは全く失なつた世界であつた。

イモ掘りをして追われる

ジップヘーゲン駅周辺の小部落では、個人畑のジャガイモの収穫が終つた。この地の作物は、大根、ジャガイモくらいのもので、それも良いものはとれない。現地人でも相当に小さいイモまで拾ひ集める。

その後を同僚たちはスコップを使って更に掘り返し、豆粒ほどの小イモを拾うのである。頑張る人は飯ごう一杯の収穫をする。

こういうところを見ては、じっとしていられない。俺も我もと真似をするのが常である。他人の掘つたところを知らずに、二度三度と掘つてみてイモがあるわけではない。あげくの果ては住民にどなられ、追われてスコップを投げ捨てて逃げ帰る。これでスコップの員数不足を来たし、器材係

が苦勞する事態となる。

工夫された正月のご馳走

昭和二十二（一九四七）年の正月を迎えるにあつて、日本人ならではのご馳走の相談がもち上がった。限られた飢餓食の中から、泣きの思いで一日一人、米十五粒の割合で貯えようというもの、五カ月前から実施された。その貯蔵米での正月の楽しみは、炊事係に一任ということになつた。

正月までには松材のうす、きねも作られた。新年の門松が立てられ、餅をつく音もなつかしく、ご馳走が待たれる。餅とは言つてもウル米となればダンゴである。しかしうすでついた餅である。一人当たり五、六センチ径のもの一個、小豆をまぶした小さなおはぎ二個、これまた小さな海苔巻三個、この海苔というのは、実は塩鱒の皮である。同じく塩蔵野菜巻一個、焼き塩鱒一切、普段より硬めの粥で、これがシベリア生活でたつた一

度の最高の食事、僚友たち一同が目を輝かした正月元旦料理のご馳走であった。

ちなみに、当時の炊事勤務者は、愛媛県出身の永易伊勢雄君、陸前高田出身 大和田末吉君、青森県出身 工藤浅吉君、釜石市出身の小沢徳太郎君の四人であった。

洗脳の赤い嵐

作業には誰もが熟練した。それと同時に、個々においても散髪、衣服の修理、ランプの工夫、座卓の製作等、身の回りの整備に気が向くようになり、あの落ち込んだシベリアボケから漸次生氣を取り戻しつつあった。そして、悪逆非道の限りを尽くしたソ連兵たちとも至情の交際が深まり、個人的には和らいだ雰囲気醸し出されて平和がよみがえるかに見えてきたころ、次は思想的洗脳工作であった。

ソ連の政治部長、秘密警察の存在感は、そのころになって我々の目にも感じとれた。兵士や住民

に對しスターリンの政策のことなど聞いたりしようものなら、固く口を閉ざし、拒否の手ぶりでも、両手の指二本を交差させ、監獄ゆきのしぐさをして見せる。

そもそも黨員教育は実によくやるが、庶民の教育らしいものを見かけたことはなかった。「一般民はほかほど使いよい」とでも考えているように……。

ソ連の人たちは、このようなことには馴れているのか、別に気にとめる風もなく、結構陽気で、だれかれなく親しげな態度をとり、気さくに、通じない言葉でもどどん話しかけてくるのである。それだけでなく、一度信頼すれば、倉庫の鍵までも預けるほどの人のよさであった。

ソ連は、当初、日本軍隊の統率力を見抜き活用した。集団の秩序を維持し、命令系統を保って強制労働力の実効を図り、その成果によって、戦後の窮乏にあえぐソ連国内経済の復興と国力増進が最大の急務であった。そのために、我々の軍隊制

度をそのまま存続させ、将校には帯刀を許可して作業の指揮権を与え、下士官・兵は隊伍の中で作業につき、依然、階級・敬称を保持継続させ、毎日の朝礼には宮城を遙拝し、故国の父母・妻子をしのびながらの「海行かば」を高らかに合唱させていたのである。

ノルマ達成の作業成績優秀者に対しては、ソ連側の認定で進級させるといふ時期があった。同時に、作業成績の悪いノルマ未達成者には「減飼」と称して食事が減らされる。定量でさえ飢餓のふちにあるのだから、死を招くだけの制度であった。ソ連流「働かざる者は食うべからず」である。こうした悲惨な処遇に対して、当方の作業隊長がソ連監督将校にたびたび抗議するが、何ら回答を得ることがなかった。

全くの自助努力の頑張りで、抑留者の心身・体調回復が見えると、すかさずソ連政治部将校の出席となる。少し前からハバロフスクで発行された抑留者向けの『日本新聞』が配布されていて、何

の情報も与えられなかった我々にとって、夢でもよいから祖国の実情を知りたいものと喜んだのであったが、どうやら内容は、日本の過去の軍国政策批判と我々に闘争心をあおり立てる趣旨であった。そしてまた、昨日まで友であり、偉大な援助・協力者であったはずのアメリカを罵倒し、我々が抱いている敗戦と悲惨と屈辱の怨念をアメリカだけに向けさせ、ご自分は「解放の紳士、面倒見のよい友」というのである。

昭和二十一年九月ころ、二十人ほどで「友の会」が発足し、我々とは離れた所で研究活動が始められた。しかし、一般には関心がなく、収容所内の変動は何もなかったが、間もなく、政治部員の出入りが頻繁となり、当方の特定の人との接触が公然と行われるようになった。それと同時に、ウソともマコトともつかぬ帰国のうわさが立ち始め、友の会が解散して「民主同盟」に発展してからは次第に運動が強力になったのである。そして、この運動の初期において我々の軍組織は初め

て完全に解体され、しかも、手のひら返しに階級、敬称が撤廃されるに至ったのであった。

永い間敬正をきわめてきた規律はともかく、習慣づいた敬称呼びを一日にして「さん」呼ばわりすることは、捕虜の身とはいえ至難なことであった。うっかりいつもの癖を出すものなら、組織委員に反動分子呼ばわりされ弾圧を受ける始末で、一時は無秩序状態に陥った。しかし、ソ連政治部員を後ろ盾に、活動分子（アクチブと呼ばれた）によって鎮圧され、ソ連式民主主義のもと一つの新しい驚くばかりの秩序が確立されたのである。それはまた、民主同盟から「反ファッショ同盟」に発展改称するに至って、恐るべきものにエスカレートしていったのであった。

その経過はソ連式裁判所構成による裁判官、検事・弁護士といった名で、反対意見者、無関心主義者を反動分子として引き出し、集団の面前で徹底討論をする。つるし上げの責めつけは夜を徹して行われ、被疑者にされた年輩の召集兵なども、

土下座して反省の誓いの言葉を泣きながら語る。

この成り行きを見守る一同は、次は自分が呼び出されるのではあるまいかとの不安を顔に浮かべ、互いに無視し合う者、余計に騒ぎ出して軽蔑の色をみせてこづく者もあり、かつての友の間に不信感の暗い影が落とされ、戦友といえどもうかつな言動は許されない事態となった。

なにせ委員長は、帰国中止の権限までも口にする権力者であった。ソ連邦の国力強化なくして我が祖国の復興は達成できない、我々は「祖国革命上陸軍」になると息巻く親ソ派、帰国の手段としての運動であるべきとの理解を秘めたグループ、これらが表面上では完全に一体となってこの思想運動が展開された。

ついには青年行動隊が組織され、文化部、演芸部等の積極的活動に力が入るようになった。多様な職業能力体験者の集団であれば、何事につけ、本職もそれ相応の能力者もいて事を欠かない。演芸部にあっては、大道具・小道具、衣装、

カツラ、三味線、農工具など、必要に応じて材料を工夫しながら手作りで役立てる。持ち前の脚本、演出、主演に至っては多くの愛好者・芸能者によって進行された。

出し物としては、封建時代の地主対小作人たちの闘争を内容としたもの、「軍政の弾圧に耐えて」「共産党闘士が今還る」など思想運動に直結したものが多く演じられた。時には、故郷の父母弟妹を慕う望郷の場面も演ぜられ、見る者一同に祖国への思いを募らせた。内容説明を受けながら演技に見入る政治部員は「ハラショー」を連呼しつつ観賞するのだった。

このようにして思想運動がソ連流啓蒙により拡大発展を続け、その思想改変の程度が帰国（ダモイ）の時期を左右するといううわさも伝わり、事実、帰国のためナホトカに集結した集団が帰国中止となつて、再度シベリアの奥地に逆送され、労働と思想教育に服しているとの話も聞かされた。

過酷な労働と最悪の生活環境の中で生命を取り

とめた者にも、一難去つてまた一難で、いじめ同様の強制的親ソ派の思想運動は、帰国時、ナホトカの港を離れるまで過激に続けられたのだった。

生きるための知恵

人は死を免れるためには全知全能が発揮される。ふだんなら思いもつかない才覚を発揮する者、不器用と思われていた人が予想外の能力を示すといったことが、収容所生活極限の中で立証され、評価されたのである。

原始的生活の中で、物を作る着想、設計、材料、工程、仕上げ方法等、すべての知識と工夫・研究の他にも、根気の要素たる必要工具の無いに等しい中で、古ヤスリとか金切鋸の刃、破損した鋸のこぎりの切れ端を集めて、小刀を作り、きりを作り、僅かな余暇を利用して、年季の入った職人業とも言える細工を仕上げるのである。まさに見せつけられたとの印象は今にして鮮明に残る。

苦肉の知恵袋

ジップ・ヘーゲンの収容所第五一労働大隊の死亡者が甚大なため、数度にわたり他の収容所からの転入・転出が繰り返された。この人たちの中には、開戦時、新京（長春）・奉天（瀋陽）にあつて戦闘待機体制のまま終戦となり、軍が解放した被服庫の中からは新品の衣服、糧秣庫からはあらゆる食料物資の放出と、一時は物量のおふれに嘆く有様で、自由奔放に背負えるだけ、持てるだけの荷物でソ連入りしたことだった。

食もなく、破れ衣服丸腰の我々とは地獄極楽の違いで、改めて人の宿命なるを痛感したが、この転入兵たちも略奪を受け、さらに収容所入り以後はパンとの交換で、背負ってきた荷物は何一つなくなつたと語り、結局、我々と同様の姿であつた。しかし、人それぞれ、性格、考え方の違いからの習癖、物好きというか、予想外の物を大事に所持している人がいるものである。そして、この鳥も通わぬシベリアで困窮生活を送っている原住

民は、すべてにわたって不自由しているので、何から何まで欲しがるのであつた。

三種の神器と化粧品

転入者の戦友は予想もしない品々を所持していた。驚くなかれ、それは事務用大型印肉、書画用の墨、歯磨き粉の三種である。しかも、いかに苦肉の策とはいえ、その着想には恐れ入つた次第であつた。事の次第は次のとおりである。

貴重な品々であれば、分量を細かく分けて、体裁を考えた容器に入れ、夕刻時、ソ連婦人の集合する場所に行き、手まねしながら「蠶の油売り」よろしく説得をはじめるのである。まず、歯磨き粉は「白粉」、印肉は「口紅」、墨は「眉墨」というのである。

ご婦人はどこの国であれ、美しくなりたい、化粧したいは本能なのであろうか。シベリア住民の大半は、もともとは白系露人の貴族、特権階級が革命後に流刑された人々の子孫で、文化人として

の血を多分にひくと聞いたが、そのためか、この化粧品との交渉は成功をおさめた。一度に黒パン五個を手にしたのである。

さっそく翌日、その当人たちはお化粧の顔を見せるべく、我々の作業場に現われたのであった。なるほど、さすがの化粧上手で彼女たちは満足げであるが、知らぬが仏とか、事情を知っている我々の方はおかしさに我慢できず、吹き出して笑う者、物陰にすわって首をうなだれる者。腹に力がない空腹者の笑いはむしろ苦痛に近いものだった。

それでも彼女たちは疑問を抱くこともなく、その場のことなど吹く風としゃれ込んでいるのである。苦い笑いの三種の神器物語であった。

棧橋の下で

貯木場の貨車引込み線に沿って五〇〇メートルもの長い積込み棧橋がある。この棧橋は松の丸太造りで、貨車積み丸太からこぼれる松の皮が、す

き間から下に積もって、かっこうの隠匿場所になり、日頃から同僚たちは利用していた。

せしめた犬の肉を松の皮を掘り分けて隠し、その日も二人組が棧橋の下にいたところ、時を同じくして棧橋上をにぎやかに会話しながらソ連マダムが数人、歩み寄る同僚たちとの物交が始まっていた。棧橋の下の連中は息をこらして頭上の様子を伺っていると、マダムたちのスカートの中が丸見えで、ノーズロースであったとか。二人の語るところでは全員がそうで、舎内での自慢話であった。ああ……。

旺盛なソ連人

働かざる者は食うべからずの鉄則で、作業ノルマはソ連人自体も厳しい。しかし、ノルマさえ完了すれば自由で、間違っても余計な仕事はしない。

伐採丸太の運搬自動車兵にしても、時には夜も明けぬうちから車を走らせて、午前中にはノルマ

を上げる。このようなとき、丸太積みおろしの我々に対するどなり散らしも特にひどいのである。

ノルマが終わると、彼女の待つ貯木場の休憩小屋で愛の営みに励むのである。人が居ようと見られようと全くおかまいなしのソ連人の神経には恐れ入る。人前で性行為をする大胆さは見て見ぬふりをするほかない。

それにしても、血気盛りの二十代であるはずの我々・同僚、だれ一人として「ピン」とも「カン」とも感度のない栄養失調。身の衰れが悲しかった。

ふんどしが化けて黒パンに

我々は当初転入者のことを物持ち連中と呼んだ。ジップヘーゲンに来る以前の収容所でも、物交で黒パンに代えてしまい、交換する物もなくなった。仕方がない、これだと言って、新品のふんどしを広げて、絵の上手な戦友が花鳥の絵をか

く。どこからどのようににして手に入れたものやら不思議でならないが、絵の具が染め粉か知らないけれども、様々な色を用意され使われている。

洗濯しても大丈夫か？ と聞くと、「それは後の祭りで……」という。説明を聞くと、ソ連マダムが炊事・食事の際の前掛けに使うのだとのことであった。ふんどしがマダムの前掛けかと笑う。ソ連マダムたちはハンカチ一枚でも欲しがるのである。彼は交渉が成立して黒パンを抱えて帰って来た。

これを見た仲間たちが我も我もとふんどし商売が流行したが、大事な着物である。ソ連式のノーパンというわけにも行かないはずなのに。

手工のはじまり

越冬も二回目を耐え忍んだ昭和二十二年、シベリアの遠い春がやっとまた訪れた。生活環境の改善、自然食等の自助努力で、第二の越冬では犠牲者を最小限にとどめることができた。しかし、一

日として脳裏から離れることのないのは帰国のことであつた。それでも、このころになると、半ばあきらめの度胸とでもいうか、つかの間のゆとり気分ひたる日々も見られるようになった。

苦衷をまぎらすのは、同僚たちが編み出す手工作である。もちろん、物交のためのもので深刻な目的ではあつたが、創造するという行為の中に、春風のようなうるおいもあつたのである。手工に必要とする器具一つ、資材一つない原始的な環境でのごと、自らの工夫と努力と執念こそが極致の業を生み出す力であれば、寸暇をいとわぬ熱中ぶりは、涙ぐましい一種の青春劇である。

釘一本見当たらない所では、太い番線の切れ端なども貴重なもので、この先端をたたいて平たくして研いで刃をつければ小さなノミ、彫刻刀に使える。鉄板の切れ端を研いで小刀を作る。拾つた古ヤスリで廃品になつた鋸を目立てし直し、小細工用の鋸を作る。針金を手入れして編棒を作るなどなど、種々雑多、多様多忙なものであつた。

これらの原材料の入手、すなわち廃品回収は、暇を見て部落の民家、駅、修理工場等、付近を徘徊し、見立てを工夫したり、利用度を考えたりしながら手工にとりかかるのである。そして、最後は人の注目を集めるに足る品々、スプーン、指輪、タバコのパイプ、将棋のコマ、マジャンのパイ、軍手や軍足などの編物に至る稼業で多忙をきわめるのである。まさに「新鉄器時代のはじまり」であつた。

執念の高級指輪

手持ちの品がなければ物交の黒パンを手にすることはできない。それなら、それに値する物を生産すればよいと、賢明なる諸君は思いつく。あくまでもある材料を対象として製品を決めるのである。千人針の五銭ずず貨を利用して考え出したのが指輪であつた。

特にこれといった工具もなく、また経験もない者が、どんな方法と手段で指輪を作るのか、企業

秘密とまではいれないが目立たないようにして、たえず気長にいじり回していたようであるが、むしろ、このような人の作る作品は素晴らしいものがある。実に不思議というほかはない。よく、なた一丁彫り、のみ一丁彫りなどの言葉があるが、こちらは金属に対して古ヤスリ一丁の作と言うべきであろうか。その出来栄は、デパートの陳列品にも劣らぬ絶品で、みな驚嘆するほどのものであった。

しかし、競争意識も手伝って、こうしたものが次々と研究開発される。シャフトの砲金部品を見付け、自動車修理工場で輪切り切断を願う。仕上げの段階で、ダイヤ、ハート型の浮き彫りと、先を抜く絶妙な細工師も出てくる始末で、当初は金製品と偽り、ソ連マダムの好評を博した高価な取り引きもなされた。

スプーン、フォーク作り

これは飯ごうの利用である。まずれんがにス

プーン、フォークの型どりをする。これは、鉄片・小刀で彫るのである。次に飯ごうをたたきつぶして頑丈な容器に入れ、器材庫鍛冶場のふいごを使って溶かすのである。これをれんがの型に流し込む。できたスプーンやフォークをたたき出したり削りとったり仕上げの形作りをして、ヤスリをかけ、砥石、サンドペーパーで磨き上げるのである。これまた市販品に匹敵する出来栄であった。何しろソ連製日用品は粗製濫造品が多かったので、見劣りはないのである。

つつじの根柢ねもくの加工品

シベリアの松林の中に自生しているつつじは、永い年月を経て育つので、根株の木質が素晴らしく、美しい柢目もめは楓の床柱材にも匹敵する。誰かがこれに目をつける。根元を掘り下げて切り倒し、根元の部分を挽き割ってタバコのパイプ、またはネックレス、ブローチ用に荒削りする。パイプの場合は、まず細い焼き針金で穴を通してか

ら、丸型、楕円型、六角型等、思い思いに形を整えて、口金部分も荒削り中仕上げなかしあげにして乾燥させる。乾燥するに従って木質が堅さを増し、この間、削ったりこすったりの繰り返しで仕上げる。

道具としては、ガラス、瀬戸焼きの破片、砥石等々を利用するのであるが、いずれもきれいな光沢が出て杢目が美しい。最後に銃弾の薬きょうを一センチくらいに切って差し込み、更なる仕上げに松喰い虫の幼虫を潰してその脂肪で摺り磨く等々、いろいろな工夫がなされた。

ネックレス、ブローチにしても、同じ花型、ハート型とデザインもさまざまで、更に彫りを施すから実に本職顔負けの逸品ぞろいで、細工は流々仕上げを御覧じろである。

もちろん、その職に通じた職柄の人もいたことであろうが、細工の腕前のほど、巧妙なる能力には、常にソ連人の驚嘆するところであった。

物を大切にする信条

何一つ物の不自由のない現代にあっては、物を大切にすることを忘れている。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」とか、あの戦中戦後の悲惨な物不足に泣いた思いも忘れかけつつある。

抑留体験での飢餓と不自由な生活から、身にしみて物のありがたさ、大切さを体得できた。あらゆる物資・物品がいかに我々の日常生活に役立っているかは、不自由してこそ、そのありがたさに気づく。特殊な環境とはいえ、抑留生活における食物はもちろんのこと、紙一枚、針金・糸一本、空き缶一個が、いかに大切な貴重品であるかの体験から、改めて、人が生活するための膨大な数々の必需品の豊かさの中で暮らせることが、まさに天の恵み、神の助けとして、物にあずかる感謝の念、物を大切にすることを信条としたい。

ロープが短くなる

秋の夜長に入ったころ、夕食後の舎内をのぞく

とランプの明かりで編み物が大流行であった。

誰もが私から顔を背ける感じ、というのは、編む糸は紛れもなく綿ロープをほどいたものである。そのころ、作業に使用するたびに綿ロープが切られていることは気づいていたが、そのせいかと直感した。しかし、同僚のことであり、世が世であれば、黙してその場を去った。今はソ連の資材でも、元々は関東軍からの戦利品であろう。どうなるかと構うことはないとも思った。

しかしまた、作業ごとにロープが短くなる。毎月の器材検査も心配だが、何よりも作業そのものに支障を来たすことである。補充は望まれぬとあれば、予防策を考えねばならない。

ロープの末端部が目につきやすくするために、末端を鉄線で締めつけ、さらに三〇センチメートルくらい墨染めして目立つようにした。一応、気休めの処置とは心得ていたが、案の定、才知の回りが大きく同僚たちのこと、今度は端から切り取らずにロープの中央から必要分を切りとって、後を

継ぎ合わせ納品してくる。これは意外と気づかずに受けとる結果になる。身内の友が生きるがための行為である。これ以上の防止策はできないから、器材検査のときは自分一人で責めを負えば済むことと認識し、黙認することになる。

ロープは純白の綿糸をよりあわせた四センチメートル径の太物で、長さ一メートルもあれば軍手が五足充分にできる。各自が編棒を作り、熟練者の指導を受けながら、俺も我もと編む。軍手、軍足、チョッキ、その他、さまざまにロープが生まれ変わる。ロープの外表面は汚れはあるが、内表面は純白。しかし、編み物製品の汚れが目立つときは、これを「よもぎ」等の雑草の煮汁で染めると、適当な模様にでき上がる。

このようにして、編み物製品は物々交換品として抑留者の体力作り、命の糧として役立ったのである。

「捨てる前に一服」

飢餓の極限、意識もうろうの中では、酒、煙草といった嗜好品など、頭から思いつきもしなければ、また、無類の煙草好きだった人、片時も酒を断ち切ることができなかったアル中の人であっても、ここでは、それは全くぜいたく品にすぎなかったということが体験立証できたと思う。

しかし、それはその物がそこにないからである。煙草好きは、白樺の葉、松の葉、よもぎの葉、その他の草を乾燥してその煙で満足していた。

抑留三年目に入るや、ソ連経済のゆとりの兆か、若干のマホルカ（煙草の葉の粉と茎をおがくず状に刻んだものを混ぜ合わせた煙草）が支給されるようになった。この刻み煙草を吸うには紙が必要であるが、特定の紙はない。ソ連人は必ず新聞紙を小さく折りたたんでポケットに入れていた。煙草を吸うとき、この新聞紙を七、八センチメートル×五センチメートルくらいに切りさいて

指にはさみ、一方の手でポケットのマホルカをつかみ出して紙の手前の方に並べ、器用に紙を丸めて巻く。巻き終わりの紙端には、つばをつけて張りつけるのである。やってみるが容易に紙がくっつかない。栄養失調では、つばも粘り気がないのだと語り合う。巻いた煙草の一方の端をひねってからこれを立て、中味の刻みを落ちつかせ、上方を吸い口として、ひねった方に火をつけて喫煙するのである。

ソ連人は慣れもあるだろうが、このマホルカの紙巻きは実到手際がよく、つばも紙がよくくっついた。これには我々も感心したが、幾らまねても容易に上達できなかった。その上、巻紙にする新聞紙の入手が困難である。「刻み煙草はやるが、後はお好きなように……」とはソ連式国情の相場である。

社会的経済事情は、即、衣食住、日常生活に現われる。このころは、ソ連人の生活向上が見られ、軍の将校たちの服装、食事は向上したと聞い

た。変わらないのは我々の待遇であった。マホルカからシーガレットに変わったソ連将校たちの吸い殻の捨てるのを番犬のように見守っている者もいたが、あさましい行為には違いないが、当時としては別にどうこう言う者もいなかった。要するに、この吸い殻の拾い集めをほどこいて、マホルカ式の一本の煙草を巻いて吸うのである。隣に居合わせた友が、「捨てる前に一服くれ」という。その恵みをいただく、また別人が「捨てる前に一服……」となる。

これは断るわけにもいかない行いである。もちろん、捨てる前に、そうそう何人もが吸えるわけではないが、知らぬ間に流行語のようになった。

ゆりかご功罪

器材係は、作業時の器材支給、収納時の員数確保と整備が主な任務であった。

整備は、作業休みまたは在庫している場合に行い、常時、夜を徹しても整えておかなければなら

なかった。毎日の作業で、通常十数丁の破損物が出る。二日分も補修が滞ると、作業に及ぼす影響は大変なものがあつた。

抑留生活二年目を迎えて、陽春の季節に誘われ、私も余暇を利用して手造りの工具で何か木工作品を作る気になり、亡くなった戦友たちの遺骨を納める箱をはじめ、収容所内の生活の便に供する手近なものの工作を始めた。

これを見かけていたソ連監督将校が、ある日、器材庫に入ってきて、「マーリンキーが生まれたので、ゆりかごを作ってくれないか」とのことであつた。私には、「マーリンキー」というのは「小さな子供」のことだとまでは分かつた。しかし、そのほかのことは皆目見当がつかず、戸惑っていたが、彼は真剣に手まねで大ききまで示し、私はどうにか納得することができた。

もはや、それは注文ではなく命令に近いものを受けとめられた。

そこで私は、材料を検討し乾燥して作らねばな

らないこと、工具が不備で、良い品物はできないだろうことを手まねで説明すると、彼も分かったらしくて「ハラショー（よろしい）」という。

私は事の次第を大藤作業隊長に報告し、了承を得て材料の準備に取りかかった。白樺の丸太を小割りし、松板を床材と決め、一・五センチメートル厚くらいに斧で荒削りし乾燥を待つことにした。

次いで自作の鍛冶設備で、必要とする一センチメートル幅と二センチメートル幅のノミを急造、また破損した鋸を加工して細引き鋸も用意した。困ったことにかね尺がない。これはにわか作りは無理なので、木製の直角定規を作って間に合わせた。ともかく、これで工具は一応揃ったことになる。かななやタテヨコの細工鋸等はすでに作ってあった。

ゆりかごの材料は熱気乾燥室に入れたので、間もなく完全乾燥材ができ、いよいよ下ごしらえとなるが、おの削りからのかんな仕上げは結構大変

であった。乾燥した白樺材は予想以上に硬くなり、名ばかりの道具では作業も思うように進まないのである。それも、器材整備をしながらの仕事、気長にやるほかはない。

いずれ材料仕上げができれば、もうあとはこつちのものである。監督将校も、間々顔を出すときもあつたが、別にせき立てることもなかった。

組手の仕口を終えて、出来栄えを良く見せるべく、両側の堅格子にチューリップの花を、切りすかしのデザインで化粧し、また手すり部分を丸めるなど、ある程度の体裁をつけて仕上げとなった。

完成を伝えると、監督将校は早速やって来た。ゆりかごを見て満面の笑みを浮かべ、「ハラショー、オーチンハラショー（よろしい、大変よろしい）」「シバシーボ（ありがとう）」と、私の肩をたたいての喜びようだった。立場はまるで違っているとはいえ、彼の満足感と私の仕事の達成感が一緒になって、他を忘れさせる大きな親し

みがわいてくるような気がした。

あの「ゆりかご」で育ったマーリンキーは、今や五十歳近い年齢に達したはずである。

収容所前哨舎には、当初数人の兵士が交替で歩哨勤務に当たっていて、その上司に若い少尉の姿が時折見受けられていた。

監督将校にゆりかごを渡して数日後、その少尉が器材庫に現われて、「おれのところにも赤ちゃんがいるので、監督さんのと同じゆりかごを作ってくれ」と言う。やはり、注文ではなく、明らかに命令だった。

私は、やっこの思いでゆりかごを完成させ、やれやれと一段落した気分と、ある種の義務からの解放感にひたっていた矢先だったので、そしてまた、器材整備も滞りがちになっていたので、またしても分外の仕事、虜囚的不満と複雑な気持ちであつたが、従う以外にはない。

ともあれ、二個めの製作とあつて、考え方も手

順も当然順調とはいえ、作業は思うように進展しない。少尉さんには二度ばかり催促されての完成であつた。

私は、別に彼らの階級にこだわる気持ちは毛頭なかった。「ただで作ってやるものに文句はないもの」という安易な考え方に従って、同じ作品ではあつたが、切りすかしの化粧細工だけは省略したのである。完全に同じものというの也能がないように思えたし、また、別のデザインで頭を悩ませる気分もゆとりもなかった。

少尉さんは、連絡を待たず、でき上がるころ合意を見計らい、期待感をあらわにしてやって来て、「ゆりかご」に手をふれて見ていたが、浮かんでいた笑顔が一瞬にして曇り、「監督将校に作ったものとはここが違う」と言うように、堅格子を強く指さしてどなった。「おまえは、階級を見て差をつけたのであろう！」という意味のしぐさで、ゆりかごを壊さんばかりの怒りようだつた。

このような場合、彼らに対しての言い訳、言いのがれは無用である。意志も言葉も通じるものではなく、黙して我慢する以外はない。どうにでもするがよい、と私は平然として立っていた。

「ニエハラジョー（お前を上司に報告して）トーキョーダモイ、ニエト！（帰国させない）」と、さんさんののしり言葉を残し、それでもゆりかごは持ち去った。

当時は収容所内に思想運動が展開されている最中であつた。しばらくは、この「ダモイ、ニエト」が私の胸にうずいていた。

木製トランク作り

ある日、一人の監視兵が一メートル四方くらいの普通のベニヤ板を手にして器材庫にやって来た。笑顔で貨車内の拾い物だという。見ると、ベニヤ板には石炭のすり傷や石灰の粉がついて汚れている。

私は、破れ貨車の穴当てに使っていたものと直

感した。彼はこれを使って箱を作ってくれのとこと。手まねの会話でよくよく聞きただと、自分の衣類や所持品入れとして使い、除隊するときには手提げにして持ち歩くのだと、その格好を見て見た。木製トランクのことと分かり作ってみる気になった。

松の割り板を薄くおの削りして、厚さ一・三ミリメートルにかんな仕上げし、縦六十センチ、横四十センチ、深さ十八センチの箱組みを作り、これに両方からベニヤ板を釘打ちして箱はできた。

これをふたにする方から五センチメートルとして箱の側板を鋸でひき割る。これでトランクの身とふたができ、ふたのずれを固定するため、箱の身の上、角から五ミリメートルほど出して細い薄板で中子を打ちつけて、あとは身とふたをちょうつがいできとめ、提げる取手を付ければ完成である。実に簡単で、何ら取り立てて言うほどのこともないが、当時のこと、シベリアのこと、一人がやると、俺も我もとたちまち流行する。果ては、監

視兵だけでなく、同僚たちもあって、大きさまざま、ベニヤがなければ松板でと、製作は大繁盛を呈した。ちなみに、ちょうつがいは皮バンドであった。

あの監視兵たちは木製のトランクを掲げて除隊したのであるが、今どうしていることか。私と同じ年ごろであった。

ソ連の鍛冶屋さん

私は器材整備の関係でジップヘーゲン部落の鍛冶屋さんにはいろいろお世話になった。鍛冶屋は貯木場と部落の中ほどにある。凍土に使うて摩滅した金テコを担いでずいぶんと通った。

鍛冶屋のおじさんは五十五、六歳の蒙古系の人であった。主に小物作りで、扉の「つぼひじ」、「かんがね」など、家庭金物の修理や部品などの仕事であった。年季の入った職人といった風格で、いつもこつこつ働いていた。

私が毎度のこと金テコを担ぎ込んでも、いやな

顔を一度も見せたことはない。もっとも監督将校の承知の上のことであるが、やりかけの仕事を後回しにしても快く私の仕事を手がけてくれた。

彼は、職人らしい悠長な面持ちで、革製の足踏みフイゴで風を送り込みコークスの炎を慎重にあり、金テコの先が真っ赤に焼けたころ合いを確かめて先をたたき仕上げる。手抜きなどみじんも感じさせないものだった。

鍛冶屋と少し離れた所には小さな大工小屋があった。やはり五十五、六年配の大工さんが一人で働いていた。監視兵の案内で、細い「のみ」を借りに行ったのが最初で、彼は無口ではあるが少しも嫌な感じを与えない人柄だった。

この大工さんの仕事は、一メートルほどのガラス窓の建具作りが多く、日本でいえば建具屋である。作り方の仕口は、三枚組、二枚組で、日本のようなほぞ組みはしない。作品は粗雑なもので、枠の中にガラスが納まればそれでよいのである。体裁も吟味もいらぬ。道具の内容にも驚く。鋸

二丁、かなな二丁、のみ四丁くらい、きり三丁とおのと数えるほどで、特別な道具は見当たらない。日本のかね尺に代わるものもなく、手造りの木製の定規がその代役をする。

後日、のみを返しに行くと、八十歳近く思える老人が大工さんと雑談していた。体格のよいロシア系の人であった。私を見るなりその老人は「ヤポンスキー」と聞いて話しかけてきた。私は言うことがわからないのでポカンとしてみると、手まねや動作を使って真剣に話を続ける。

この老人は、日露戦争中、日本の捕虜になり、四国のどこかに収容されたとのことであった。

「日本のウォッカ（焼酎のことらしい）はうまくいった。仕事も楽だったし、死者も少なかった」とのこと。

この老人は海軍だったようで、日本海海戦の将兵だったのである。私に握手をして励ましてくれた。

ソ連の人々は、個人的には実におおらかで、気

さくで、好感の持てる民族だと思われる。それが、権力による抑圧、厳格な命令や刑罰・制裁に対処する上で、身内同士の間でさえ心を許さない厳しさとなって現われたのであろう。シベリアは時に大地のみならず人の心も凍てつきやすいのかもしれない。

遺骨の収集と埋葬

昭和二十三年、シベリアの短い春が夏の気配を伝えるころ、どこからともなく本物らしい帰国のうわさが高まっていた。それにつけても気がかりなのは各所に放置されたままになっている屍の整理であった。

シベリアの最初の死亡者はソ連側の指示により埋葬され、以後も火葬が認められて、遺骨は分骨してマッチ箱に入るくらいのガーゼの袋を作り、本籍、住所氏名、死亡年月日を記して、三十センチメートル四方の木箱を私が作り、事務所に安置していたが、その後は、処理のいとまなど全くな

く、コチコチに凍った死体をそりに積み上げて、離れた場所の雪の吹きだまりに泣く泣く置き去りにしていたのであった。赤色委員会はもちろん気にとめる様子などない。

後に知ったことであるが、長尾作業隊長以下四人で密かに収容所を抜け出し、十キロメートルほど離れた山の中へ二日間出向いたとのことであった。そこには何百体に及ぶ屍が、山の面に散乱していた。すでに白骨化し、風雨にさらされるままである。それらを集められるだけ集め、長い間弔うことのできなかったことをわびながら一カ所に埋葬し、長尾作業隊長が「皇軍将兵の墓」と白樺の墓標に筆を下ろし、野花を手向け「海行かば」を合唱して下山したとか。

スンハラの作業所でも、塚田作業隊長の指示で、遺骨を一カ所に埋葬した。ここでは、徳下さんとという方が観音菩薩像を彫刻して遺骨と一緒に葬ったと聞き、ジップヘーゲンでも、本部要員が中心となって、ささやかな供物を手向けて、一応

の用いは済ませることができた。

しかし、これらはほんの一部分のことである。何千何万もの遺族とつながる人間の屍を、冷凍まぐろさながらに放置してきた苦衷は、生涯の汚点として消え去ることはないのである。もとより遺体は何一つ語るものではないが、死者のそれぞれの顔が、筆舌に尽くせない深い哀愁と怨念と苦悶の面相となって我々の網膜に焼きついたのである。

シベリア鉄道を西から東へ走る貨車の高窓から、帰国の途につく日本人捕虜が手を振る姿を見かけるようになったのもそのころである。

帰国命令

昭和二十三年七月五日は、生涯忘れることのできない帰国（解放）命令の出た記念の日となった。

シベリアの短い夏は、この季節から一週間ないし十日である。その日は晴れあがった日で、いつ

もと変わりなく同僚たちは貯木場の運材作業に出て行った。私は一人で器材庫の器材整理をしていると、九時半ころ、突然、庶務係をしていた江藤伍長が「監督が来て、作業現場引き揚げだ」と高声で伝えながら貯木場に向かって走って行く。

私は、とっさに、思想問題かあるいは何かの事件でもと不吉感がよぎった。

やがて作業現場から、何事がおこったかと不審げな顔で同僚たちが帰って来て広場に集合する。

そこへ監督将校が姿を見せ、「ヤボンスキー、ダモイ、ハラシヨ（日本人、帰国、よろしい）」帰国の準備をせよとの指示である。

デマも噂もあきらめていたこのころ、唐突のこの言葉に一同はびっくり仰天し、鬼に見られている監督将校はたちまち神様の笑顔に見えた。居並ぶ同僚たちは、万歳、良かった良かったと、互いにはち切れそうな笑顔で抱き合い、喜びあふれる興奮と感動のるつぼを呈した。しかしまた、そのかたわらに、うそかまことかはかりかね、半信半

疑の思いでぼう然と立ちすくむ人もいた。

十時にソ連收容所長から正式に五一一労働大隊の帰国命令が伝達され、出発時間は午後三時と発表された。舎内での準備は簡単で、限られた身の回り品を早くまとめ終え、所内の整理清掃も「立つ鳥跡を濁さず」と、てきぱきした動作で片付け、何よりもスンハラ分駐隊の下山が待ち遠しかった。

スンハラ隊が塚田隊長を先頭に山から下りて来たのは午後二時ころだった。にぎやかな話し声があり、こぼれるような満面の笑顔で、子供のようにはしゃいでいた。直ちに本部要員と各小隊長が集まって帰国についての協議。一般に各自の衣服、雑のう、私物は持ち帰れることになったが、死没者名簿を含む記録あるものすべて、また、記録できるもの、筆記具、用紙の類は禁ずるというものであった。

もちろん、誰であれ、それにはあまりこだわりの見せなかった。一つしかない命を祖国へ持ち帰

れる、それだけでよいのだ。だが、残念なのは、亡くなった戦友の遺骨と遺品を持ち帰ることが禁じられたことである。これは最後まで納得しかねた問題だった。

遺骨であれ遺品であれ、あくまでも我々の手で保管管理していたものである。また名簿は、戦死者とシベリアでの病死者を区分して、事務局人事係の高野曹長の調べにより作成保管されていたのである。それがどうして持ち出せないのか。赤色委員会は一体何を考えているのだ。理解のつかない怒りから、いろいろな憶測まで渦巻いていたのである。

日ソ双方、それぞれお別れのあいさつが交わされ、簡単な出発式が行われた。チタ司令部から派遣されてきたソ連軍の少佐は、流ちょうな日本語であいさつをした。

「皆さん、長い間ご苦労さまでした。いま、皆さんは日本へ帰ります。日本へ帰りましたら、ソ

同盟の本当の姿を日本の皆さんに伝えてください。私たちは共産主義になってくださいとは申しません。この国の本当の姿を伝えてくださればそれでよいのです」

塚田作業隊長もまた我々を代表してあいさつを贈った。

「ソ同盟の輝かしい産業五カ年計画の完成と限りない発展を祝福する」

次いで両国国家の合唱の後、代表相互の握手が交わされた。しかし、誰もが興奮状態で、あいさつなど耳に入らない。汗と涙をにじませた舎屋に別れを告げ、引込線ホーム棧橋へと移動する。

貯木場の引込線には、二段装置された迎えの有蓋貨車が三十両ばかり待っていた。誰が作ったものか、白樺の枝に飾られたレーニン、スターリンの肖像画が貨車の両側に取り付けられている。広い貯木場には、我々の血と涙を流した丸太が高く整然と列をなして積まれているのが見えていた。

棧橋上で乗車人員割りをする。今度は我々が貨

車積みされる番である。二十年十一月三日の真夜中に重い足どりで降り立って以来、二年七カ月、多くの戦友を失い、今あのとときの半分にも満たない人数が帰国の貨車に乗ろうとしている。神妙かつ複雑な思いである。あらためて八百有余の遺骨を置き去りにする心苦しさにさいなまれた。

再び訪れることもないジップヘーゲンを見納め、はやる気持ちで貨車に乗り込んだ。列車は駅へと移動する。各車両の扉は開いたままで、駅では少数ながら部落民の見送りをうけた。

今度こそ東、とナホトカに向けて発車する。ああ、帰国だ。一日として脳裏から離れたことのない帰国だ。生きぬいた嬉し涙で語るにぎやかな会話がいつまでも続いた。

それにしても亡き戦友の遺骨。戦病死者名簿はどうなったのだ、との動議が出る。強力に交渉して携行の努力をすべきではなかったか。我々が帰国して、遺族に対して申し訳がたつまい。それは誰のせいだ、彼のせいだ、となる。しかし、我々

自身日記もメモも全部捨てさせられたではないか。さまざま意見、目くばり、耳打ちで話題がとぎれる。

途中、停車する駅ごとに民主同盟の腕章をつけた抑留グループが我々を迎え激励する。「皆さんは帝国主義を打倒し、新生日本を建設するために祖国へ敵前上陸するのです」と革命歌を歌いながら見送る。貨車の中では、「ナホトカまで行っても思想運動の成果が認められない反動集団は、再び山奥の作業収容所に逆戻りさせられている」などと語り合った。

引揚列車は、途中ハングン駅で第五一五労働大隊が乗った車両を増結し、七月七日チタ駅に停車後、丸六日間の旅を終えて最終駅カーメンカに到着したのは夕刻迫るころであった。丘の東方から懐かしい潮風の薫りがする日本海のほとり、幸せはそこまで来ていた。

ナホトカと朝嵐丸

ナホトカには引揚船を待つ大集団が仮設収容所や幕舎に入居していた。ソ連全域にわたる六十万とも七十万とも言われる抑留者が、ここナホトカが帰国への最終点であり、唯一の乗船地であった。またダモイ試験の最後の関門でもある。

ここナホトカ収容所にも腕章をつけた大勢のアクチブ（思想活動分子）が引揚げ業務、監視統制等を行っていた。ソ連軍への協力により絶大な権力を持つ、抑留貴族とも称され、当のソ連人よりむしろ彼らの方へ嚴重な注意が必要であった。

ソ連式思想運動の仕上がり具合の判定によるのか、反ソ分子という密告によるのか、再度シベリアの奥地に逆送された集団も事実あったと聞いた。万が一にもそのような誤解でも受けようものなら万事休すである。どんな言い訳も理由も絶対

に耳をかさないのがソ連人の習性である。
この集結地には、広場、野外舞台等、至るところに

「勤労者の祖国、ソ同盟万歳」

「資本主義打倒」

「天皇島上陸作戦」

などのスローガンを書いたたれ幕が張り巡らされ、腕章をつけた案内係の名目で数多くのアクチブが右往左往目を光らしている。プラカードを手にして労働歌も高らかに場内を行進する集団、舞台上で大演説会、劇団・楽団が入れかわっての昼夜の熱狂ぶりで、物々しい雰囲気は圧倒されそうになる。

ナホトカには関所とも言える分所が第一から第四分所まであって、第四分所は病弱者の収容で、我々一般は第一分所から氏名の確認、人員点呼、入浴、消毒、服装、所持品検査、集団の再編成と第三分所の通過で帰国待機の体制となる。入口と出口は完全に切り離されており、途中から戻ることとはできない。第一分所で入浴のため衣服を脱げば、入浴が終わっても脱衣所へ戻ることはできず、裸のまま前進して消毒、第二分所に通じ、洗

濯消毒された別の衣服の支給を受けるといふ具合で、肌身離さずの所持品であっても、この手にかかつては万事休すである。雑のうその他の所持品は、一切相手側の手で消毒、嚴重な検査が実施される。しかも、この期間中、どこでアクチブの目が光っているかしのれない。不運な出来事が起こりはせぬかと、誰もが不安で気兼ねする連日であった。

ナホトカに着いてから十三日目の七月二十三日、乗船が決定した。長い長い船待ちの日々であった。二十二日の夜は事なきを得て、明日は乗船できる嬉しさに、皆、子供のようにはしゃぐ。興奮の中、戦友ともども尽きぬ話に夜を更かした。明けて午前九時、帰国者名簿の読み上げが始まり、自分の名前を聞き取ったときの感激は胸に迫る思いで、五列の隊伍に加わり岸壁へと移動した。船尾には日の丸が懐かしく翻っていて、心強く安堵の気持ちを誘った。甲板からおろされた

「みなさん、長い間ご苦勞様でした」のたれ幕、船首に記された「朝嵐丸」は二万五千トンもの大船である。

先頭からソ連側の再度のチェックを受けながらタラップを上る嬉しき、甲板上には船長さん、看護婦さんが並び、いちいちあいさつをいただく。

朝嵐丸も我々同様戦陣の生き残り輸送船であったが、戦後もこうして活躍していた。船体の内外の傷跡、塗料の剝脱、赤いさびが目立ち、くたびれた船の容姿が感じられた。船室の区分を受けてから身軽になって上甲板へ、解放された自由、束縛感のない行動のできる爽快さ、午前十時、朝嵐丸は二千人の同僚とともに大海原の船路を祖国へと急ぐ。シベリアの山並遠く亡き戦友の靈に黙禱を手向けながら……。

舞鶴への船路と祖国・望郷

七月二十四日真夏日の晴天下、大海原に一筋の航跡を見せて朝嵐丸は祖国を目指しエンジンの響

きも心地よく船足を速める。船内放送では二十五日の夕刻舞鶴入港予定ということであった。まさに大船に乗った気分、船内では談笑の輪をつくる者、紙切れや鉛筆を工面して互いに郷里の住所書きを交換する者、郷里までの順路・名所などを説明する者、体を横たえて思いをはせる者、遙かな水平線のかなたを眺望する者、日露の日本海海戦をしのぶ会話に熱中する者など、誰に遠慮束縛のない会話と行動の自由に、あらためて平和の中で人の親近感と解放感にひたるのだった。

船内の食事は、夢にまで見た白米のご飯・味噌汁・魚・タクアン・梅干、これこそ祖国の味、日本の味である。もはや欲望も不満も消えうせ、幸せを満面に笑みたたえ、目を輝かしての食事風景は、感謝いっぱい満腹であった。

船が日本海の間点を通過したころであろうか。明日の今ごろは舞鶴だと私たちグループは上甲板にいた。夜も更けて、月こそ見えぬが満天の星空のもと、ないだ海はあくまでも心地よく、甲

板上には多くの戦友たちが涼風と親しみながらにぎやかに談笑が続けられていた。

突然、船尾の方から荒い声がする。近寄って見ると、十数人に囲まれて、中央に三人ほど正座していた。

「我々は祖国に帰れるが、亡き戦友の遺族には何と申し訳をするのだ！」

「遺族に合わず顔があるか」

「遺骨が帰れなかったのはきさまらの責任だ」

「ソ連の言いなりにしたのは誰だ」

「とにかく、遺骨を持って来い！」

「この海を渡ってシベリアへ取りに行け！」

「何が祖国への敵前上陸だ！」

けんけんごうごうたる暴言の連発で、多少の暴行もあったようだ。

当然、かの地での思想運動にまつわる遺恨のからむ事件だった。いかなる場合であれ、自分自身そのものである物の考え方、思想を強制された押さえることのできない圧力が、戦友の遺骨を置き

去りにしたという、ざんきにたえない感情とともにはね返ったものだった。

正座した三人はわびの言葉で頭の下げ通しである。時が変われば立場も地位も平等である。だれ一人として仲裁に入る人もなく、一時はどうなるかと心配されたが、しばらくして事なきにおさまり一件落着した。

七月二十五日の午後、「日本が見えるぞ……」の一声に、上甲板の人の群れが移動した。船首は人で埋まる。見ると、かすかな水平線上に浮かぶ陸地の面影、歓喜の万歳がわき立った。直視する誰の目にも涙が光っている。船首から離れる者は誰もいない。

朝嵐丸と陸地との距離がいよいよ縮まり、夕刻の舞鶴の山並みが手にとるように見える。ああ、一日千秋の思いがつかないかなうのだ。船は速力を落とし静かに湾口へすべり込む。

一夜を停泊の船中にあつて、夜明けの舞鶴港を

眺望する。港内には爆破され座礁した艦艇、輸送船の無残な姿がさらされ、敗戦の生々しい傷跡が見られた。しかし目を転ずれば、朝日に映える深緑の山並みがあった。「国破れて山河あり……」その景色は、真つすぐに郷里と結んで、懐かしさを一層引き立てた。

にわか造りの仮設栈橋に「長い間ご苦勞様でした」の横断幕。アーチの飾りつけが我々の上陸を待つ。はしけ舟二隻が往復して順次上陸が開始された。

第一歩の土を思い切り踏み込んだ。土の感触が祖国に帰れた安堵感を下から押し上げる。多くの出迎えの人波の前を、みすぼらしい姿も忘れて笑顔で会釈しながら通る。出迎えの人たちの中には、のぞき込むように我が子、我が夫、兄弟を探し求める姿がある。抱き合つての涙の対面も見られた。限りない感動・感激は生涯脳裏から離れない。

明けて以後三日間、防疫、戦闘経路、収容所、戦病死者の報告を済ませ、七月三十日、帰国者二千人は舞鶴駅へと向かった。上陸からこの間、出迎えの方々はもちろんのこと、地元舞鶴市民の温かいねぎらいのお言葉やお茶などの接待をいただいたことは、今にして忘れることのない感激であった。

駅頭では生還のよろこびが一層深まり、歓喜の渦、励まし合いの言葉などでごった返す人ばかりであったが、一人一人誰もが心は故郷に飛び、南へ、北へと車窓の人となる。

おわりに

戦争のむなしさ……慰霊

平成七（一九九五）年の新春の陽光が、平和な日本国土をやさしく照らしている。

時の流れは今年で戦後五十年、半世紀の節目を迎えている。青春時代を大戦の中にさらして九死に一生を得た生還者、おびただしい数の戦争体験

者も、この半世紀の流れとともに減少しつつある。

どのように体験者であっても、各々の心の中に、それぞれ後世に残し伝えたいものを数多く抱えているはずである。また、それぞれに誇りある日本人として、あの宿命とも思える戦争へのぎりぎりの清算に心をくだいておられるに違いない。たとえ、それが不十分なものであろうと、生きていくうちに我々自身が踏み出す一步一步が、未来への平和国家の維持を約束するものと確信する。

歴史が物語るように、古来から、国の内外を問わず、時の流れとともに戦争がつきまとうてきた。そして、その都度、人の社会は悲惨な思いと甚大な被害を被ってきた。万物の霊長を自称する人間社会にあって、この愚かさは余りにも嘆かむしい限りと思おうであらう。

戦争にあっては、相手を殺さなければ自分が殺される。それも集団による大量の殺し合いであ

る。さらに一般民といえども、今やその外にいることはできない。残虐非道は常套手段であり、勝敗を決するためには一国の総力動員が必要となる。人命、兵器、その他莫大な物量の消耗と破壊を見越してのことであれば、誰であれ事の結果・結末の重大さに意を注ぐ者はなくなり、ただただ勝敗だけに血道をあげるのである。

しかし、勝敗はどうであれ、人命の死に泣く悲哀は双方とも変わりはない。遺族の悲嘆と苦境はこの世の限りである。また物資の損耗は、ともに国民全般の経済におびただしい窮乏をもたらすのである。戦争体験者は、世界中どの国でも語っている。『戦争ほど馬鹿げたことはない』『愚の骨頂だ』と。

戦後五十年。あのソ連大軍団を前に、砲なく、銃なく、弾もなく、ただ肉迫して若い血を広野に散らせた多くの戦友たち、また、戦傷と疲労に耐えながら囚われの身となり、地獄にも勝る凍てついた大地で、飢餓と望郷の念にさいなまれながら

侵攻の責めを果たし死んでいった同僚たちの白骨が、はるかシベリアの草木にうずもれ、風雨にさらされ、墓標もなく、花一輪、線香一本の慰めもなく風化の一途にゆだねられているのである。

幸い、日ロ関係の一面的好転から、平成五年、新しい財団法人 太平洋戦争戦没者慰霊協会（会長 瀬島龍三氏）による北方地域戦没者慰霊事業が開始され、シベリア平和慰霊公苑建設計画のもと、遺骨収納、納骨堂、慰霊塔、多目的会館その他の完成が待たれるに至ったことは同慶のいたりであるが、今なおまぶたの裏より消えることのない友人たちの霊を真に慰め得るのは、生き残った我々をおいていないとの認識を新たにし、『あやまちは繰り返さない、繰り返しさせない』の気概とともに、戦没者の遺骨収集と墓参こそが終生の責務と心得ている次第である。

シベリアにさまよう六万余の霊に伝えたい。「我々の青春も今なおシベリアにある」と。

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県大船渡市大船渡町明神前

生年月日 大正十一年十月

学歴 昭和十二年三月 日頃市高等小学

校卒業

職歴 同 十二年四月 建築大工徒弟修

業

同 十五年 釜石製鉄社宅建

築

軍歴 同 十八年二月 関東軍一〇七師

同 十九年十月 陸軍兵器学校

同 二十年四月 九十連隊本部

陸軍伍長

同 二十年八月 満州西部国境に

て日ソ戦闘に参戦

同 二十年八月二十九日 武装解

除

シベリア抑留 同 二十年十一月三日 シベリア

同 シップヘーゲン収容所に収容、強

制労働に従事

同 二十三年六月 ナホトカ収容

所 労働

同 二十三年七月 ナホトカ出港

帰国

帰国後の職歴 同 二十三年七月 建設業自営、

大船渡職業訓練協会長、大船渡地

区技能士会長

(岩手県 田辺 壮久)

この足この目の記録

岩手県 鈴木 重五郎

幼少三歳原因不明の病。目から入菌、放置すれば失明して死亡、治っても馬鹿になると医者から扱一宣告を受け、祖母は馬鹿でもよいから生かし